

校長室より



みさごたより

2021. 9.21 (火)



薩摩川内市立里小学校

Espresso Part 9

文責：永野
No.11



パラアスリートから学んだこと

学校便り「かけはし」9月号に続いて

パラリンピック最終日、その瞬間、腕に鳥肌が走る感覚を私は覚えました。

「**ここでか!**」それは 女子マラソン視覚障害のクラスで スパートをかけ勝負に出たその瞬間、道下美里 (みちした みさと) 選手の姿を目の当たりにした時のことです。

レースは後半、道下選手とロシアの選手二人のトップ争いでした。“どちらかがどこかで勝負をかけてしかけてくる。競技場までもつれてのスプリント (短距離) 勝負なのか、それともどこかで…” マラソンの終盤は常にそういった緊張感につつまれます。



レースが動いたのは 30Km すぎの給水地点を越えたあたり
道下選手が一気にスピードを上げ、ロシアの選手を引き離し
独走状態となりそのまま優勝。金メダルを獲得しました。

スパートの瞬間、伴走をつとめていた志田淳さんが勝負どころを見極めスパートをかけられるか問うと、道下選手は

「いける」と即答だったそうです。

視覚障害のマラソンは、ガイドランナーと呼ばれる伴奏者が、ガイドロープで結ばれたランナーの目となり 42.195km を一緒に走ります。この時は、前半を青山由佳さん、後半を志田さんが担当



しました。ガイドランナーは、ランナーが安全に走ることができるようランナーの目となり、周囲のコース状況を伝えるだけではなく、ランナーのコンディションを見極め、ペース配分を行い、さらには、刻々と変わるライバルの走りから勝負どころを見極めるなど、本当にランナーと一体となり支えています。

前半、事前の作戦どおり青山さんは、一定のペースを保ち道下選手の体力の温存をはかっています。そして、後半の道下選手の走りを志田さんに託したのです。

日頃の練習を行っている福岡県の公園では、一緒に走ってくれる 10 人以上の伴奏者がいるそうです。コロナの流行で、練習ができなくなり困っているときも、そういった人々が、声をかけ合い、人のいない山道や、人通りの少ない早朝に、道下選手が練習できるよう、時間や場所を工夫して参加してくれたそうです。

「私のことを理解して一緒にチャレンジしてくれた仲間がたくさんいた。
この競技は1人では走れないけど、みんなとならできるということを教えてくれる。『世界一の伴奏者』に金メダルをかけてあげたい」

そう話していた道下選手が、表彰台で金メダルを受け取り、最初にメダルをかけたのは、自分ではなく伴奏者の青山さんにでした。





両腕のない卓球選手 **イブラヒム・ハマト**選手が
パラリンピックに出場するまでには、どのような歩
みがあったのでしょうか？

彼は10歳の時に電車のドアからの落下事故で
両腕を失いました。それから1年ほどは、「^{あわ}哀れみ
の目を向けられたくない」と家の中にひきこもって

いたそうです。その後スポーツを勧められてサッカーを始めますが、バランスが取れず何度もケガ
をしたため、あきらめてしまいます。13歳の時に村のスポーツ施設^{しせつ}で見た卓球^{きょうみ}に興味を持ちま
した。そんなある時、友人たちの卓球の試合の審判^{しんぱん}をしていると、判定に不満^{はんてい}をもった友人から次
のように言われます。 **「プレーできないくせに口出しするな」**

この言葉が、彼の負けたくないという強い気持ちを目覚めさせ、卓球選手としての歩みがスタート
することとなったのです。（経歴参照：ウィキペディア フリー百科事典）

日本は戦争^{しんさい}や震災があっても、その度に復興^{ふっこう}をとげてきました。そしてコロナ禍の東京五輪^かもそ
うです。そういうことを踏まえてのことなのでしょう。彼は次のようにインタビューに答えていま
した。

「日本は不可能を可能にしてきた国。私も（不可能を可能にできる）メッセージを伝えたい」

東京パラリンピックで日本に初のメダルをもたらしたのは、14歳の中
学3年生、**山田 美幸**（やまだ みゆき）選手でした。彼女は日本のメダ
リストの最年少記録者^{さいねんしょうきろくしゃ}となり、競泳女子100mと50mで2つの銀メダル^{きょうえい}
を獲得しました。山田選手は、生まれたときから両腕がなく両足にも障
害があるため、普段の生活では電動車いすを使っています。足で車いす
を器用^{きよう}に操作^{そうさ}するばかりでなく、足でマスクやゴーグルも巧み^{たく}につけま
す。性格はとても前向きで明るい様子が、インタビューから伝わります。
そんな彼女が、レース後の取材で言葉^{ことば}を詰まらせる場面がありました。



「（お父さん）頑張ったよ。私もカッパになったよ」

美幸さんのお父さんの口ぐせは、「お父さんはカッパだった（カッパのように泳ぎが得意だった）」
病を押して、ずっと競技生活を支えてくれたお父さんは、大会を目前にひかえた2019年5月、
自宅で倒れ、息を引き取ってしまいます…。心配するコーチ陣^{じん}、1ヵ月余りたち、「水泳を続けた
い。気持ちが湧^わいてきた」と話し、彼女はプールに戻ってきました。それ以来父のいないつらさを
人前で見せたことは一度もないといえます。彼女の視線は、すでに3年後のパリを見えています。
そして中学3年生として「高校受験^{こうこうじゅけん}があるので、まずは勉強に集中しようと思います」

パラリンピックにはアスリートの数だけドラマがあります。

WE HAVE WINGS （私たちには翼がある）

アスリートたちの姿から、私たちが学んだこと それをふり返りつつ未来につなげていきましょう。